

「今どきの学生」と本気で対峙し 生き方を見つけさせる



福岡女子大学国際文理学部准教授

和栗 百恵

わぐり・ももえ

中央大学総合政策学部卒業。米スタンフォード大学大学院教育研究科修了。スリランカや日本のNGOを経て、2002年から中央大学、早稲田大学、大阪大学で大学教育における体験学習の実践研究を進める。2009年から現職。

「学習にはそつなく取り組むが、自己認識が甘くひ弱である」。

和栗准教授は「今どきの学生」をそう見立て、教育や社会の影響を指摘する。

現実社会と向き合わせる体験学習を通して、

それぞれの生き方を見つけさせ、能力を伸ばすという自らの実践も交え、

キャリア教育に対する考えを語ってもらった。

目標を「つかみ取る」 意識・行動に乏しい学生

ここ数年私が見てきた学生は、高校の教科をまんべんなく学んできただけでなく、あいさつやお礼もできる、真面目で「いい子」が多い。一方で、あらゆる環境を当たり前のものだと思い、生きることへの渴望感がないため、自分を見つめ直すことがないし、見つめ直したいという強い思いも持てないようだ。「地頭」がよいのに、時には失敗しながらも没頭して何かに取り組んだ経験がなく、自分を信じていないから、簡単に諦めてしまう。つまりレジリエンス*1が十分に発達していない。これは、広く全国の学生に共通した問題ではないだろうか。

福岡女子大学は、全国初の公立女子高等教育機関として「次代の女性リーダーの育成」を建学の精神に掲げてい

る。だが、日本でも子どもの6人に1人が相対的貧困状態*2にある中、自分の置かれた環境がたまたま恵まれていたという特権性を自覚し、その特権を自らのためだけではなく、社会のために生かすという意識や行動を涵養しなければ、真の女性リーダーにはなれない。

私の授業を履修している1年生に目標設定をさせると、手慣れた様子で目標や方法を書き上げる。高校までに、「やりたいこと」「なりたい自分」を描く教育が繰り返し行われてきた成果なのだろう。しかし、今年度、7月中旬までに9人中5人が履修を放棄した。消費者感覚で学校教育を受け、きついと思ったらすぐ「自分には合わない」と投げ出す。目標の遂行を自らに課し、公にコミットし、責任を果たしていくという習慣がついていない。

そうしたひ弱さは、必ずしも彼女たちのせいとはいえない。自分や他者と

真剣に向き合い、困難を乗り越える経験をさせてこなかった家庭や学校、社会の責任が大きい。理想の将来像を設定するだけであつたり、世の中の深部に触れない表面的な体験にとどまったりする「なんちゃってキャリア教育」をいくら施しても、生徒、学生は伸びない。今の社会は誰の、どんな苦労や志、やりがいにより成り立っているのか。その中で、自分はどのように生きるのか。体験を通して現実を突きつけることで、目標を描くことはできても真剣にコミットしない中途半端な姿勢に気づかせるキャリア教育が必要だ。

実践と厳しい対話を通し 人生を切り拓く力を育む

2011年度の国際文理学部開設を前にして赴任した私がまず取り組んだのが、体験学習を通したキャリア教育だった。通称「和栗プログラム」は、前期から夏休みにかけての事前学習科目、通年の現場体験科目、後期の発展学習科目の3科目、合計6単位からなる1年間の全学共通科目だ(図表)。

正式名称は、現場体験科目のフィールドワーク先によって、「スリランカ・

Exploring “Development” プログラム」「香椎まちづくりサービスラーニング」「福津市インターンシップ」等となっている。どのプログラムも事前学習と発展学習でも座学だけでなく、地域事業への参加、地域住民との協働などの学外学習を含んでいる。座学と現場での学習を繰り返すことでPDCAサイクルを回し、自らが立てた目標に対してどこまで学びが進んでいるのかを日常的に考えさせるのが目的だ。

履修生全員が事前・発展学習の中で取り組む「八百屋女子大」では、月2回、学内で地元産野菜の直売所を運営する。販売前に生産者とのやり取りや大学近辺への告知活動を行うことはもちろん、販売後は売り上げ目標の達成率、客との接し方の改善点などを徹底的に分析。私の役割は、その過程で容赦なく「なぜ?」を問い続けることだ。学生はもがきながら考える。こうしたクリティカル・リフレクション(批判的

振り返り)を通してコミュニケーションやマーケティングなど、現実の世の中を成り立たせているしくみの根底にあるべき、他者や社会への眼差し、構えを磨く。

和栗プログラムは「キツイ」との評価が定着しており、授業中に涙を流す学生も珍しくない。しかし自分を探るべき10~20代に、いわば心の成長痛・筋肉痛を自覚しながらコンフォートゾーンを抜け出すという通過儀礼を経なければ、自分で人生を切り拓き、先行き不透明な時代を生き抜く構え、そしてスキルは身に付かないはずだ。

厳しい指導は、個々の学生をよく知ったうえでなければできない。会話やレポートを情報源として活用し、学生個々の強みや弱みを知り、徹底的に鍛えさせるパーソナルトレーナーになってこそ、学生は自己の学びや変化を批判的に振り返り、「なりたい自分」と現実との調整を図れるようになる。

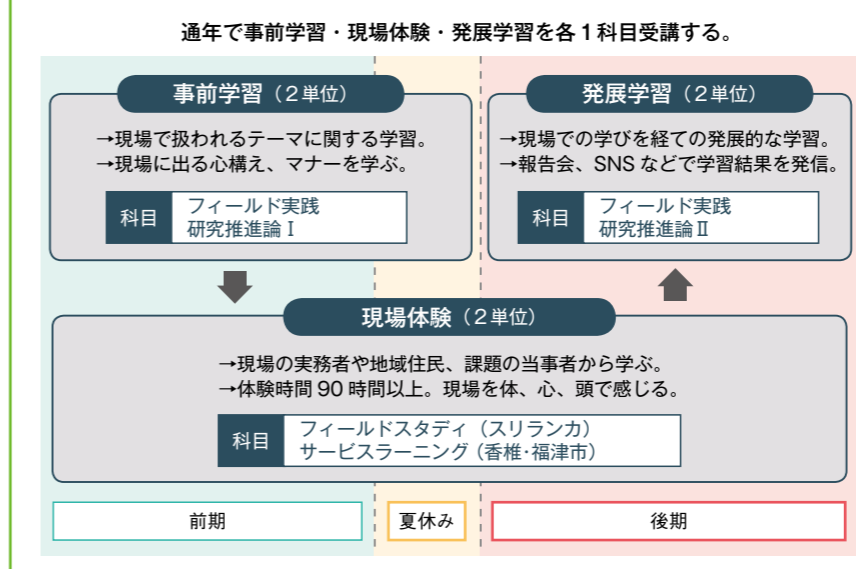
学生に寄り添いながらも 対峙する姿勢を

大学のキャリア教育は充実しているように見えて、すでに形骸化が始まっている。形だけのキャリア教育では、自分の将来を「与えられた課題」としては考えられても、「本気」では考えられない。大学はDP、APそしてCPという3つのポリシーやそれらの下でのキャリア教育を「与えられた課題」、そして「書いて終わり」ととどめてはならない。輩出する人物像を意識した大学改革を続ける中で教職員のスタッフィングにも工夫を凝らし、組織として人材育成にコミットする必要がある。

同時に、個々の教員の意識や行動の改革も重要だ。教員は、今後どのような社会になるのかを、自身が突き詰めて考えておく必要がある。学生の人生に立ち入るわけだから、嫌われることを恐れずに対峙する度量も必要だ。社会の厳しさを知っている教員が学生のもろさを受けとめ、突き放しながらも寄り添うことで、社会と主体的に関わる姿勢を学んでもらう。これができれば、本人に適した就職先が見つかる可能性が高まるし、たとえ希望の就職先でなくても、与えられた場で活躍し、次のステップにつなげられるだろう。

将来が不透明な現代に求められるのは、「なぜ、どう生きるか」を自ら問い試行し続け、あらゆる状況で活躍できる力を付けるキャリア教育だ。そこでは、付け焼き刃の自己分析や採用試験のためのテクニックは不要になる。学部卒業時、就職時は人生の節目ではあるが、ゴールではないのだ。(談)

図表 「和栗プログラム」の構成



*1 失敗や挫折、不利な状況に直面しても、くじけずに回復、成長を遂げられる力。心理学用語。

*2 等価可処分所得がその中央値の半分に満たない人のこと。その地域や社会において標準的な生活を送れない状態とされる。